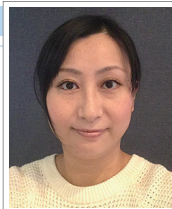




2020年7月1日着任

内 田 真理子

うちだ・まりこ

機器センター
事務支援員

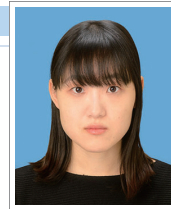
2020年7月より大学連携研究設備ネットワークの業務を担当させていただいております。学生時代や企業でも少しだけですが研究に携わっていた事があり、機器利用に関わる業務に就かせていただけて嬉しく思っております。

事務についてはほとんど未経験ですが、周りの方々にサポートいただきながら取り組んでいます。

今後とも精進して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2020年8月16日着任

NAM, Dayeon

生命創成探究センター
創成研究領域 特任研究員

2020年に北海道大学大学院総合化学院で博士（理学）を取得後、8月より青野グループの特任研究員としてお世話になっております。博士課程在籍時DNAタンパク質におけるヘム結合の機能解析を、主に分光学で行ってまいりました。現在でも関連する研究を行いながらも、生体内で鉄以外の役割もタンパク質の構造及び機能の研究を行い、研究所に貢献したいと思います。よろしくお願い致します。

2020年10月1日着任

三 輪 邦 之

みわ・くにゆき

理論・計算分子科学研究領域
理論分子科学第一研究部門 特任助教

2014年に大阪大学で学位を取得後、理化学研究所、カリフォルニア大学、ノースウエスタン大学で研究員として勤務し、2020年10月に南谷グループの特任助教に着任しました。光とナノ物質の相互作用、開放量子系でのダイナミクスに興味を持ち、単一分子分光やプラズモニクスに関する理論研究を行ってきました。分子研ではこれまでの経験も生かしつつ、新しい研究展開にも挑戦したく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2020年10月7日着任

VISOOTSAT, Akasit

生命・錯体分子科学研究領域
生体分子機能研究部門 特任研究員

I received my Ph.D. degree from the Department of Functional Molecular Science, School of Physical Sciences, SOKENDAI, in September 2020 under the supervision of Prof. IINO. From October, I continuously worked in the same group as a postdoctoral fellow. My theme research is engineering the molecular motor proteins and observing their motion behaviors based on single-molecule imaging analysis. I am enjoying doing research here as the completeness of the facilities and research environment of IMS.

2020年11月1日着任

菅 沼 光 二

すがぬま・こうじ

装置開発室
技術支援員

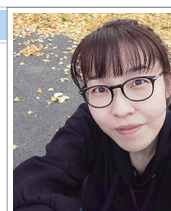
2020年11月1日より装置開発室の技術支援員としてお世話になっております。岡崎市で生まれ岡崎市で育った私ですが、この度こちらの機構で働く事が出来る様になるとは夢にも思いませんでした。

25年程、プラスチック射出成形金型の設計製作に携わってきました、その経験を生かしお役に立てられるよう業務に邁進していきたいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。

2020年11月16日着任

中 貝 梢

なかがい・こずえ

生命・錯体分子科学研究領域
錯体物性研究部門 研究支援員

2020年11月より草本グループの研究支援員としてお世話になっております。高校3年間を過ごしたこの東岡崎駅界隈に再び戻ってくることができ、懐かしさと嬉しさでいっぱいです。大学卒業後しばらく離れていた有機合成の世界に再び飛び込むチャンスにいただけたことに感謝しながら、早くグループのお役に立てるように努力したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



2020年12月1日着任

岡崎圭一

おかざき・けいいち

計算科学研究センター
准教授

2020年12月1日付けで、計算科学研究センターの准教授に着任しました。2016年に特任准教授（若手独立フェロー）として分子研に来ましたが、さらにお世話になることになりました。専門は生物物理で、分子シミュレーションを始めとした理論・計算手法で、生体分子マシンの機能発現ダイナミクスの研究をしています。共同研究等を通じて研究の幅を広げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

覧古考新28 | 1995年

分子研の特徴の一つも組織が比較的小さいことだと思います。小さな組織には、運営上の小回りが利くことのほかにも、構成員のお互いがいろいろな面で融通しあいながら仕事をできること、構成員同士の密接なコミュニケーションが可能なことなどの長所があると思います。そして、分子研はこれらの長所を活かしながら発展してきたと思います。ところが私が在籍していた間に、これらの長所を活かそうという雰囲気が失われてきたような気がします。たとえば、他のグループの研究に対する関心の低下、共通利用の施設や装置を大切に融通しあって使おうという意識の低下などが感じられます。これらの原因は、分子研の組織が大きくなってきたことなののでしょうか。それとも、所員の世代が変わってきたことなののでしょうか。

人の入れ替わりが激しい分子研では、私のように8年半もいると古株になってしまいます。10年もたたないうちに構成メンバーがほとんど入れ替わってしまうのですから、20年30年勤続の教官が珍しくない大学とは違って、分子研は本質的に変化してゆくものだと思います。伝統や慣習にとらわれることなく、新しい手法で新しい分野に切り込んでゆけることは、分子研が世界の一流の座に居続けるためにはきわめて重要なことだと思います。しかし同時に、せっかくの良い伝統や慣習があつと言う間に失われる可能性もあるように思えます。先人たちが築いてきたものを越えて進んで行くためには、良いものは守ってゆくという努力を他の組織以上にしなければならないと思います。変わりがながらも良いものは守ってゆくという姿勢が、今後の分子研発展の一つの鍵になるのではないのでしょうか。

分子研レターズ No.33「分子研を去るにあたり：変わりゆく分子研によせて」（1995年）

高柳 正夫（東京農工大学助教授）